





国語問題

はじめに、これを読みなさい。

- 1 この問題用紙は11ページある。ただし、白紙はページ数に含まない。
- 2 試験時間は60分である。
- 3 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
- 4 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
- 5 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答欄は裏面にもある。
- 6 問題が指示する数より多くマークしないこと。
- 7 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
- 8 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
- 9 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
- 10 解答用紙はすべて回収する。持ち帰らず、必ず提出すること。
- 11 この問題冊子は、必ず持ち帰ること。
- 12 解答をマークするときには、記入例を参照すること。

良い例	悪い例
	  

(マーク記入例)

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私は日本に対するさまざまな起伏をもった体験のはてに、日本の彼方にヤポネシアという歴史空間の幻をみるようになったようである。しかし私にとってヤポネシアとは、日本人に特有な水平願望を意味するものではない。昨日も今日も明日も、飲み食い、騒ぎ、そしてそれ以上にかくべつ野心をもたない人びとの渦まく日本列島社会そのものである。島尾敏雄の造ったヤポネシアという言葉に私がひかれるようになったその裏がわには、日本列島社会を「日本」と同じものと考えたくない心情がある。私にとって日本というイメージは手垢によれすぎた。そのイメージを洗うものは、日本よりもっと古い歴史空間か、日本よりもっと生きのびる、つまり若い歴史空間かのどちらかではない。日本よりも古くかつ新しい歴史空間、それが私にとってのヤポネシアだ。

「日本」は、単系列の時間につながる歴史空間であるけれども、ヤポネシアは、多系列の時間を総合的に所有する空間概念である。つまり、日本の外にあることとヤポネシアの内にあることとは、けつして矛盾しない。なぜなら、ヤポネシアは「日本」の中にあつて「日本」を相対化するからだ。

私たちは、ナシヨナリズムを脱しインターナショナルな視点をもとうとすれば、単系列の時間につながる歴史空間であるところの「日本」を否定するしかなく、「日本」を肯定するとなれば、単系列の時間の中に組みこまれるほかない道を歩まされてきた。「日本」に埋められるか、「脱日本」のどちらかしかない二者択一の道をえらばされた。けれどもヤポネシアは、日本脱出も日本埋没をも拒否する第三の道として登場する。日本にあつて、しかもインターナショナルな視点をとることが可能なのは、外国直輸入の思想を手段とすることによつてではない。ナシヨナルなものの中に、ナシヨナリズムを破裂させる因子を発見することである。

それはどうして可能か。日本列島社会に対する認識を、同質均等の歴史空間である日本から、異質不均等の歴史空間であるヤポネシアへと転換させることによつて、つまり「日本」をヤポネシア化することで、それは可能なのだ。

ヤポネシアの成立する理由のひとつとして、日本列島社会が、世界の国々の中でも面積の割にはもつとも長い緯度のあいだに散在していることがあげられる。チリのように陸つづきでなく、島嶼として存在することで、いつそ文化の同質均等化からマヌカれているところに特徴がある。^a

ヤポネシアの概念が成立する理由の第二は、日本列島社会に古いものと新しいものとの混在が幾重層にもみられることだ。いちいち例証をあげることにははぶくが、日本の近代に中世や古代が雑居している現象をみることは、けつしてめずらしいことではない。そしてこうした現象は、儒教やキリスト教でローラーをかけられた国では例外に属する事柄なのである。支配者の統一原理としての文化概念が極度に不寛容な形で貫徹されるということは、日本列島社会には存在しなかった。すなわち、支配者の統一原理がときには神道であり、仏教であり、儒教でありして、しかもそれらが他を全面否定することはなかった。

以上の理由からして、多系列で異質の歴史空間が日本列島社会では展開可能であるという事実が、ヤポネシアという概念を成立させる根拠なのだ。

日本の列島社会を単系列の時間ではかるほど不当なことにはないにもかかわらず、日本ほどそれを無反省に濫用し、強行した国家はめずらしい。日本人のこうした傾向は、ヨーロッパやアメリカの意識の尺度で日本をはかる態度に拍車をかけた。すなわち、日本人の意識はつねに「ポリ」ネシアのかわりに「モノ」ネシアが、また「ミクロ」ネシアのかわりに「マクロ」ネシアが存在したのである。

モノカルチュアのマクロな世界とは、要するに大陸国家の特徴なのであるが、「ネシア」に育った日本人には、つねに大陸とか大國とかへのあこがれを捨てることができず、今日でもふつきれないでいる。この「**A**」や「**B**」な意識の尺度は、多系列の時間と意識とが複合的に重層化している日本列島社会をはかるのに、もつとも実状にそぐわない方法なのだ。

「モノ」や「マクロ」へのあこがれほど「ネシア」の意識に固有な特質はない、ということもできないわけではない。しかしひるがえって考えるならば、それが「**C**」や「**D**」の意識空間である「ネシア」の人びとの無自覚から出発しているところに、日本の悲劇と喜劇があったのであり、日本がついに「日本」を破ることのできない原因がそこにあったことを考えるならば、

私たちがヤポネシアの概念をもち出す当然の権利を誰しも否定することはできないのである。

日本人はイギリス人ほどにも「E」意識に徹底しないままでいる。しかし、そのイギリス人もヨーロッパ全体の嫡子であるという正当性を頑固なまでもちつづけている自己矛盾をあえて意識しない。タスマニア島の歴史は、ブリテン島の歴史に劣る価値をもつとは言えないというのは、たしかレヴィ・ストロースがヨーロッパ(注)パヘンチョウの価値基準にむかつて吐き出した痛烈な批判であるが、これと同様な対比が「日本」とヤポネシアの関係についてもいわれよう。

そのまえに断わっておきたいが、私は「ポリ」や「ミクロ」をたんに空間的に考えているのではない。大陸文化の圧倒的な流入のもとにさらされながら、いわば複合文化体をそれは意味すると同時に、また日本列島内部の諸空間の意識の重層性を意味するのであり、さらには、日本の資本主義の跛行的な進行がもたらした現象をも含めているのである。そこには、他の「ネシア」社会とはちがうヤポネシアの独特の位置づけがあるのだ。

また「ミクロ」とは、日本における空間意識の精密さを指している。たとえば封建的とか封建時代とかいっても、その実体が私たちにどれほどわかつているか知れたものではない。それは「F」な世界の封建制の概念で、すなわち中国やヨーロッパ風の範疇で封建ということばの内容を論ずることがあまりに多いからだ。もしミクロな封建社会の実体構造をつかみたいと思つたら、「石見日原村聞書」や、中村吉治の『日本の村落共同体』に触れる必要があり、また沖繩と日本との対比において奥野彦六郎や崎浜秀明の研究による沖繩の間切(村)の内法(慣習法)を知る必要がある。少なくとも私はこれらの諸書に触れて、歴史概説書の粗大な説明とはちがった日本の封建社会のきめこまかい、微視的なイメージを得ることができたのである。

こうした「G」「H」な特質をもったヤポネシア社会は、日本という国家の成立以前から存在し、日本列島に住民の生活があるかぎり存続する。それは日本という国家の命運いかんにかかわらないのである。同じ日本列島社会をあらわすヤポネシアと日本との、このような微妙な、しかし決定的な相違こそは、ヤポネシアの存在が、日本を超えた重要さをもつものであることを告げるものだ。

このことを本能的に察知しているのが知識人でなく常民と呼ばれる人たちであることは、皮肉である。無自覚な形であるにせ

よ、常民が漠然とそれに気がついて生活しており、「市民」または「人民」という言葉をやたらとふりまわす知識人が、かえってその感覚に鈍感であるという事実は、私をひとつの感慨にさそいこむ。

歴史の彼方から存在する常民は、国家意識の枠組みの中にあるばあいでも、その規制とは異なった次元に自分の意識の中心核を従属させる。こうした常民の意識の前提に立つて日本民俗学は成立した。しかし明治官僚であった柳田国男も、近畿の風土に生まれた折口信夫も、ヤポネシアの意識を方法論にとりいれることで日本を相対化する論理を構成するには、あまりにも単系列の時間の近くに自分を置いたのである。時間の垂直軸に対する信仰の否定を一步すすめて、多系列の時間とそれにつながる空間意識の重層化を肯定したものととして、柳田の「山の人生」と折口の「異郷意識の進展」をもつことはせめてものなぐさめであるけれども、ヤポネシアは、この線をさらにいっそう強化していかねばならぬ。

おそらく、これまでの日本人の自己認識はあまりにも通時的であつて、共時的なものへの追求が不足していたと言ひ得る。それは空間的把握力が弱かつたということであり、この欠陥は日本列島社会を、その意識空間の構造において分析することがなかつたことにながつていく。

一口にいえば **ア** な「日本」にくらべてヤポネシアは **イ** であり、また時間の **ウ** に貫かれた「日本」にくらべて、ヤポネシアは空間の **エ** を志向するものといえよう。だからといつて、一部の人たちのように未来信仰にまどわされて、日本列島社会を恣意的で単一な空間とは考えない。なぜなら人間集団の生活があるところに、意識と切りはなされた空間があるはずはなく、空間といつても、それはあくまで意識空間にはかならぬからだ。

日本の各地方の歴史が、それなりの全体性をもつて相対的独立性をもつことを主張することが、まぎれもないヤポネシアの成立と伴であるとするれば、その一方では、多系列で異質な時間を単系列の時間という一本の糸に撚り合わせていったのが「日本」であり、そのために支配層が腐心し、ときによつては、糊塗と偽造をもあえて辞さなかつたのが「日本」の歴史である。したがつて、撚り合わせた糸をもう一度撚りもどす作業、つまり「ヤポネシアの日本化」を **X** 化へと還元していく努力が要請される。

吉本隆明が「異族の論理」で示唆しているように、時間の無限溯行のための努力が払われなくてはならぬ。そのはてにあらわれるヤポネシアの幻こそ未来へ投影できるものであり、そのためには、下降するエスカレーターエスカレーターの階段を逆上していくにひとしい苛酷な苦行を自己に課さなくてはならないことだけはまちがいない。

(谷川健二『沖繩』より)

*文中に一部省略した箇所がある。

(注) レヴィロストロース——フランスの人類学者。

問1 傍線 a・b のカタカナの語を漢字で書け。

問2 傍線①の指す内容としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 単系列の時間と空間を否定する日本列島社会としてのヤポネシアは、日本の中に存在することによって、古い歴史空間としての「日本」の姿を浮かび上がらせることができる。

2 多系列の時間をもつ日本列島社会としてのヤポネシアは、おなじ日本の中にありながら、単系列の時間を基本とする歴史空間としての「日本」の姿を浮かび上がらせることができる。

3 多系列の時間と空間を肯定する日本列島社会としてのヤポネシアは、単系列の時間を超えることによって成り立つ歴史空間としての「日本」の姿を浮かび上がらせることができる。

4 単系列と多系列の時間を融合する日本列島社会としてのヤポネシアは、おなじ日本の中にあつて新しい歴史空間に成長した「日本」の姿を浮かび上がらせることができる。

問3 空欄A、Bに入れるのにもっとも適切な語を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。同じ語を複数回用いてもよい。

- | | | | |
|-------|-------|---------|-------------|
| 1 ヤポ | 2 ポリ | 3 モノ | 4 ネシア |
| 5 ミクロ | 6 マクロ | 7 ナショナル | 8 インターナショナル |

問4 傍線②の指す内容としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 日本と並行して、同質均等の単一空間としてのヤポネシア社会が存在するという感覚。
- 2 日本に左右されながら、異質不均等の歴史空間であるヤポネシア社会が存続してきたという感覚。
- 3 日本を超えた重要性をもつて、生活空間としてのヤポネシア社会が存在しているという感覚。
- 4 日本が意識空間としてのヤポネシア社会を長い間支配してきたという感覚。

問5 空欄ア・イに入れるのにもっとも適切な語を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 空間的
- 2 時間的
- 3 通時的
- 4 共時的
- 5 歴史的
- 6 社会的

問6 空欄ウ・エに入れるのにもっとも適切な語を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 絶対性
- 2 相対性
- 3 柔軟性
- 4 垂直軸
- 5 回転軸
- 6 水平軸

問7 傍線③をわかりやすく言い換えるとすればどうなるか。次の文の空欄の字数に合わせて適切な語をひらがなで書け。

支配層が国を治めることに心を⁽¹⁾ し、ときによっては、統治のため一時しのぎに⁽²⁾ たり、
⁽³⁾ をつくったりすることをあえて避けなかった

問8 空欄Xに十字以内で適切な語句を入れよ。(句読点は一字と数える)

問9 次の部分を本文中に補うとすれば、どの箇所がもっとも適切か。その直前の五字を抜き出して答えよ。(句読点は一字と数える)

征服されず自分にひきつけて消化した、

(二)

次のIは鎌倉時代初期の歌学書「無名抄」の「榎の葉井の事」という逸話、IIは平安時代歌謡「催馬楽」の「葛城」という歌(はやし言葉は省略)である。IとIIを読んで、後の問に答えよ。

I ある人いはく、「宮内卿有賢朝臣、時の殿上人七、八人相伴ひて、大和の国葛城の方へ遊びに行かれたることありけり。その時、ある所に、荒れたる堂の大きにやうやうしきが見えければ、あやしくて、その名を逢ふ人ごとに問ひけれど、知れる人もなかりけり。かかるあひだに、ことのほかに鬢白き翁一人まみえけり。これはしもやうあらむとて、尋ねければ、これをば豊浦の寺とぞ申すといふ。人々、いみじきことなりと、かへすがへす感じて、さるにては、もしこの辺に榎の葉井といふ井やあると問ふ。みなあせて、水も侍らねど、跡は今に侍りてとて、堂より西いくほどもさらぬほどに行きて教へければ、人々興に入りて、やがてそこに群れあて、葛城といふ歌數十返唱ひて、この翁に衣ども脱ぎてかづけたりければ、覚えぬことにあひて、喜びかしこまりて去りにけり」とぞ。

近く、土御門の内大臣家に、月ごとに影供せられけることの侍りし頃、忍びて御幸などなる時も侍りき。その会に、古寺月といふ題に詠みてたてまつりし、

ふりにける

A

の榎の葉井になほ白玉を残す月影

④ 五条三位入道これを聞きて、「やさしくもつかうまつれるかな。入道がしかるべからむ時取り出でむと思ひ給へつること⑤を、かなしく先ぜられにたり」とて、しきりに感ぜられ侍りき。このこと、催馬楽の言葉なれば、誰も知りたれど、これより先には歌に詠めること見えず。そののちこそ、冷泉の中將定家の歌に詠まれて侍りしか。

II

葛城の寺の前なるや 豊浦の寺の西なるや

榎の葉井に白玉沈くや 真白玉沈くや

しかしてば国ぞ榮えむや 我家らぞ富せむや

(注1) 宮内卿有賢朝臣——平安時代末期の楽人、源有賢。

(注2) 土御門の内大臣——平安時代末期から鎌倉時代初期の歌人、源通親。

(注3) 御幸——後鳥羽院の御幸があったことを指す。

(注4) 五条三位入道——『千載和歌集』の撰者、藤原俊成。冷泉の中將定家はその息子。

問1 有賢たちの質問に対して、傍線①の「翁」が返答した言葉が二箇所出てくる。それらをIの文中から抜き出し、最初と最後の三字を書け。(句読点は一字と数える)

問2 傍線②で、なぜ人々は「興に入」ったのか。その理由についてももっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 道で出会った翁がかつて宮中の楽人で、催馬楽にこの地の榎の葉井が出てくることを教えてくれたから。
- 2 道で出会った翁がかつて宮中の歌人で、催馬楽にある榎の葉井の歌の作者だとわかったから。
- 3 道で出会った翁の案内で、催馬楽の歌にうたわれて有名な榎の葉井をこの地で偶然見ることができたから。
- 4 道で出会った翁の機転で、この地に関係が深い催馬楽の榎の葉井の歌を演奏してくれたから。

問3 傍線③の「かづけ」とはどのような意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 褒美として与える
- 2 返礼として貸す
- 3 祝儀として舞う
- 4 形見として授ける

問 4 傍線④⑤の主語は誰か。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 『無名抄』の作者
- 2 殿上人
- 3 翁
- 4 後鳥羽院
- 5 五条三位入道
- 6 冷泉の中將定家

問 5 空欄 A に入れるのにもっとも適切な詞句を、II から抜き出して書け。

問 6 II を参考にして傍線⑥を解釈するとすれば、どれがもっとも適切か。次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 催馬楽の歌そのままに、井の底に白玉が残っていて月と重なり合っている。
- 2 月の光だけは催馬楽の歌を思い出させるように、井の底の白玉を浮かび上がらせる。
- 3 月の光さえも催馬楽の歌に感じて、井の底に残った白玉を照らしでている。
- 4 催馬楽の歌のとおり、井の底に白玉が沈んでいるかのように月の光が残って映っている。

問 7 傍線⑦に表われた五条三位入道の気持ちとはどのようなものか。もっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 先走ったことを悔やむ気持ち
- 2 先を越されて残念に思う気持ち
- 3 先に他界したことを悼む気持ち
- 4 先例になったことを悲しく思う気持ち

問8 『無名抄』の作者名をA群から、またこの作者の作品名を二つB群から選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|---|----|-------|--|----|-------|--|----|------|--|----|-------|--|----|-----|
| | A | 1 | 兼好法師 | | 2 | 二条良基 | | 3 | 世阿弥 | | 4 | 西行 | | | |
| | | 5 | 鴨長明 | | 6 | 橘成季 | | 7 | 後白河院 | | | | | | |
| | B | 1 | 金葉和歌集 | | 2 | 保元物語 | | 3 | 平家物語 | | 4 | 金槐和歌集 | | 5 | 愚管抄 |
| | | 6 | 発心集 | | 7 | 梁塵秘抄 | | 8 | 方丈記 | | 9 | 栄華物語 | | 10 | 山家集 |
| | | 11 | 明月記 | | 12 | 古今著聞集 | | 13 | 徒然草 | | 14 | 十六夜日記 | | | |